谷地区民俗調査報告③

# 白岳神社と祭り

佐藤末喜

日　時　平成二十四年十二月十日　午後一時～
場　所　白岳神社社務所
話し手　佐藤武洋さん（白岳神社宮司・西寒多神社権禰宜）
聞き手　二宮修二　佐藤末喜

**＊神社と佐藤家**

この神社の宮司は歴代佐藤家が世襲で務めており私で二十九代になる。初代の左近大夫信廣は伊予の豪族河野通信の家臣で武士であるが、おそらく「神職として止まるべし」との命は、豊後の国に拠点を作れという政治的な意味ではなかったかと推測している。祭神の一つである佐藤九一郎霊の九一郎は信廣の通称と考えられるが、系図には記載がないし言い伝えも残っていない。正確には不詳というほかない。年四回の祭りが古くから連綿として挙行されて来たのは、当家が世襲の神官として務めてきたからであると思っている。

**＊神社**

神紋は三つ葉葵と右三つ巴である。なぜ三つ葉葵かについては、その由来が定かでない。紀州の熊野権現を勧請したことから、紀州の徳川家から葵の紋を使うことを許されたなど、いろいろの推測があるが不詳である。

上宮は海抜一〇〇米の峻険な白嶽山の頂上にあり、巨石信仰や山伏修験の名残もある。神社名の白岳はこの白嶽に因む。

大友宗家の信仰が厚く多くの神領が寄贈されている。勧請した河野通信の出自から、河野水軍や森藩・久留島家との関係を予想されるむきもあるが、記録にも伝承にもない。狭間氏とのかかわりもなかったようだ。

当社は建久二年（一一九一）の創建、明治六年に郷社に列せられており、近在では最も古い郷社である。明治九年に酒野、山田、岡地区の四神社を合祀して以来、開運・厄除けの神・安産の神として崇敬を集めてきた。昭和五十四年上宮改修の際、神殿裏の崖から五分の四ほどはみ出していた石を掘り上げて、下宮に移した。祭神の一つ菅原道真神の化身として「学びの石」として祭り知恵授けの神とした

**＊氏子の範囲**

旧谷村の酒野、山田、岡、白岳の四つの集落が氏子の区域であ

り、大将軍神社や天満社など近隣の神社との重複はない。総代は酒野二人、山田二人、岡と白岳で一人合計五人でありこの中から総代長を決める。

**＊祭り**

春祭（祈年祭）―三月二十日　　総代のみで神事

夏祭―　七月三十日～三十一日　　上宮で神事、総代のみ

○神輿渡御祭（四年に一回、昭和三十年代は毎年）

・順路　上宮―山田―馬籠―谷東部―東山―中恵―酒野―下宮（一泊）

三十一日　下宮―酒野―白岳―岡―中恵―上宮

神事は山田を下りた所と酒野の二か所で行う。

・担ぐ人

最低十人、一日目十二人、二日目十二人

山田四人、酒野四人、白岳と岡で二人。神輿の前後を山田と酒野が担ぎ、真中は白岳でコントロールする役目。

・神輿の陣容

先頭は中学生が扮する猿田彦、次が獅子舞→汐振り（祓いの役目）→総代長→高張提灯二張→神輿→提灯二張→宮司→囃子（太鼓・笛・小太鼓）

近年は囃子などは軽トラックを使うので、キチンとした隊列を組んで歩くということではないが大体の順番は上記の通りである。

猿田彦が先頭を歩くのは、天孫ニニギ尊が降臨する際案内役で先導したという記紀神話にもとずく。

例祭　九月三十日（宵祭り）～十月一日―鎮座記念祭

建久二年八月（旧暦）に遷座したことを記念して新暦に当てはめた。

神事のみだが神社本庁から献幣使が来て幣帛料が出る。

十年に一回神楽を奉納する。直近では、一一九一年（建久二年）から起算して八二〇年目に当たる昨年、二〇一一年に奉納した。

秋祭　十二月二十日―新嘗祭・神事のみ

**史料と解説**

史料①　神社明細牒（明治四十五年・大分県公文書館蔵）

大分県管下豊後国大分郡谷村字白岳

郷　社　　白　岳　神　社

一　祭神　　伊邪那美命　　泉都事解男命

菅原神　　速玉男命

大山津見命　　佐藤九一郎霊

誉田分命

一　由緒　元ト紀伊国ニ鎮座ス熊野権現ニシテ建久年間伊予国住人河野四郎通信ト云シ者家臣佐藤左近大夫ヲシテ豊後国谷村白岳ノ峰ニ岩窟アリ彼岩窟ヲ開墾サセ建久二年八月熊野権現ノ分霊ヲ遷座勧請ス而シテ明治六年月日不詳郷社ニ列セラレ菅原神佐藤九一郎霊誉田分命ハ同九年七月二八日願済本社へ合併

一　神殿　竪壱間　横壱間

一　拝殿　竪四間　横四間

一　境内　九百参拾七坪　官有地第壱種

一　境内神社　二社

八幡社

祭神　応仁天皇

由緒　不詳

社殿　竪壱尺　横弐尺

山神社

祭神　大山祇命

由緒　不詳

社殿　竪壱尺　横壱尺

一　氏子　七拾戸

一　大分県庁迄　四里弐町

以上

同国同郡谷村鎮座　字山田

山神社　式外

祭神　大山津見命

神殿　竪壱丈　横六尺

勧請年号干支月日不詳

祭日　二月十六日　十二月二日

境内反別　壱畝九歩　官有地

由緒　無御座

同国同郡谷村鎮座　字米田

天満社　式外

祭神　菅原道真公

神殿　竪九尺　横六尺　拝殿　竪壱丈壱尺　横九尺

勧請年号干支月日　不詳

祭日　二月二十五日　六月二十五日　十二月二十七日

境内反別　三畝弐歩　官有地

由緒　無御座

同国同郡谷村鎮座　字尾畑

九一郎社　式外

祭神　佐藤九一郎霊

神殿　竪九尺　横六尺五寸

勧請年号干支月日　不詳

史料②　神社合併願（明治八年・大分県公文書館蔵）

祭日　六月　十二月　日限不定
境内反別　廿五歩　氏有地
由緒　無御座

同国同郡谷村鎮座　字臺良
八幡社　式外
祭神　誉田分命
神殿　竪弐間　横壱間半
勧請年号干支月日　不詳
祭日　六月　十一月　日限不定
境内反別　弐畝九歩　官有地
由緒　無御座

同国同郡谷村鎮座　字龍王平
龍王平社　式外
祭神　天水分神
神殿　竪七尺　横壱丈壱尺
勧請年号干支月日　不詳
祭日　旧暦六月八日　十二月八日
境内反別　壱畝拾五歩　官有地
由緒　無御座
右五社字白岳　白岳社エ合併

③解説・　河野通信について

由緒に出てくる河野通信（一一五六～一二二三）は鎌倉前期の武士。伊予国風早郡河野郷（現北条市）を根拠地とする。古代の名族越智氏の一族である。源頼朝が挙兵した治承・寿永の内乱の際はいち早く源氏方に立ちその功績によって頼朝の御家人となり伊予国最大の武士団の棟梁となった。妻は北条時政の娘・やつ（政子の妹）、頼朝とは義兄弟である。源平合戦では義経軍に加わり兵船を率いて屋島・壇ノ浦で活躍した。特に壇ノ浦では堪増率いる熊野水軍と協力し平家打倒の主力となった。文治五年（一一八九）の奥州合戦にも従軍、奥州藤原氏と義経を滅ぼした。頼朝の死後も鎌倉に常駐して重きをなしたが、承久の変（一二二一年）では後鳥羽上皇側について敗れ、奥州平泉に流されて配所で没した。六十八歳、通称は四郎。

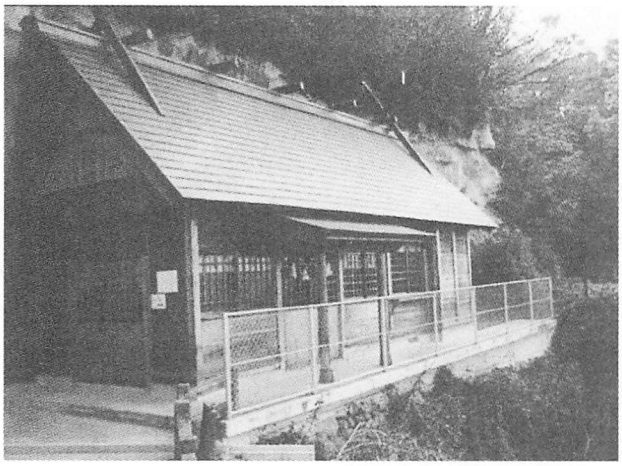
時宗の開祖・一遍は彼の孫に当たる。

平家滅亡後頼朝・義経が離反、豊後は緒方維榮が義経軍の主力であったことから反頼朝の拠点とみられ、謀反人追捕の名目で頼朝の知行国とされた。

文治元年（一一八五）のことである。由緒に云う建久二年（一一九一）八月の勧請遷座は、頼朝の意を体した御家人河野通信の豊後国人対策の一つではなかろうかと推測される。建久七年（一一九六）頼朝の信任が厚い鎌倉御家人・大友能直が豊後国守護に任じられている。

④解説・白岳神社の祭神

当初の祭神は、伊邪那美命、速玉男命、泉都事解男命（ヨモツコトサカノオ）の三神で、熊野権現と同じである。記紀の神話によれば、黄泉の国においてイザナギ命とイザナミ命とが離別を宣言したときに二神が生まれた。唾を吐いた神（結合）をハヤタマオ（速玉男命）、それを掃った神（離縁）をヨモツコトサカノオとする。ヨモツは黄泉国、コトサカは関係を裂く意、隔てる意。

権現とは日本の神号の一つである。日本の神々は仏教の仏が仮の姿で現れたものであるとする本地垂迹思想に基づいた神号である。「権」という文字は、「臨時の」、「仮の」という意味である。

明治八年に合祀した祭神は、①大山津見命―山を主宰する神。古事記では大山津見神、日本書紀では大山祇神として登場している。②菅原道真公、③誉田別命（ホンダワケノミコト―応神天皇）、④佐藤九一郎霊、⑤天水分神―アマノミクマリノミコト、水の分配を司る神、の五神であったが、天水分神は現在の祭神からは除かれている。